



まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第6号(平成25年7月15日)

読者数：434名(募集中)

メールアドレス：hirosima.idea.c@urban.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

ノックしない扉は、開かない

広島アイデアコンペ実行委員会会長 前岡智之

私は、よくこんな話をします。

『ある町のあるお家でのことです。夜もふけて、家族全員すっかり寝入っています。低いゴォッという地鳴りでみんな目を覚まします。地鳴りはバリバリ～バリバリと次第に大きくなってきます。みんな外に飛び出します。すると暗闇の向こうから、とてつもなく大きな物体がすごいスピードで迫ってきます。危ない！つぶされる！抱き合っ、身を縮めた時です。大きな物体は、すれすれのところを通り過ぎていきました。次の朝です。外に出てみると家の前に大きな道路が出来ていました。』と、地鳴りの正体は、まちづくりでした。

私たち市民は、身近なことについては、日頃から関心が持てるけれど、それが地域のことや街のこととなるとなかなか関心が持てません。関心を持つとしても、どこでなにをしたらいいのか、わからないのが現状です。

行政とか政治とか、どこかで考えられ、決定されて、結果として市民は知ることと成ります。しかたがない、そんなものだと思いきや、自分達の将来を決めることなのに、関心や関わりが持てないのです。

自分達で自分達の街のことを考えて、自分達のわかるところでまちづくりが進んでいく。そうすることで、たとえ下手でも納得ができる街になっていく、そう考えたいものです。そのために、ホームページや新聞等で行政の動きを知ること、できるなら参加することを心がけることから始めましょう。

2年前、私達が企画・運営した“被爆100年広島市中央公園アイデアコンペティション”では、全国から72のすばらしい提案が寄せられました。

これらの提案を、可能な限りの方法で、ひろしま市民に公開して、最もふさわしいと思われる案を見い出して、良いと思われた案に投票してもらい、投票数の多い案を表彰しました。

併せて、国際的、専門的な視点から提案作品を見ていただいて“平和記念都市ひろしま”に相応しい案を推薦していただきました。

300を超える市民投票がありました。1年前、この300を継承すると共にさらに市民のまちづくりへの参加を拡大していく方法として、このメールマガジン【まちづくりひろしま】を発刊しました。

このたび第6号の発行に至り満1年を迎えます。今では、400を超える読者に参加していただいています。

次の1年では、メールマガジン【まちづくりひろしま】を継承し、読者の拡大を図ります。当面の目標は、1000です。

また、インターネットの活用により、双方向性を持つものにしていきます。併せて、具体的な活動を模索するために、ここまでで紹介したまちづくり活動団体との交流を始めます。そしてこの交流を次第に拡大します。

そう、まちづくりは、ひととひとの繋がりが原点、“お互いにノックしない扉は、開かない”のですから。

ひろしまのまちづくりの動き

○サッカースタジアム検討協議会スタート！

第1回サッカースタジアム検討協議会が6月6日（木）に市役所で開催された。広島市、広島県、広島商工会議所、県サッカー協会が合同設置した協議会では、建設地や規模、建設主体や管理運営方法等を議論し、来年3月頃に中間報告を、来年秋に最終報告を取りまとめる。

今回は初回であり、会長に広島修道大学の三浦浩之教授を選出し、サッカースタジアム整備に係る諸課題の確認と今後の議論の進め方について意見交換がなされた。委員の構成はスポーツ系の組織代表5名とまちづくり系の学識経験者5名、女性の有識者1名の計11名である。



サッカースタジアム検討協議会

コメント

サッカー関係者は先に建設地を絞って議論すべきと迫り、まちづくり系の委員は広島におけるサッカー文化のあり方について認識を共有するのが先決という。どうも議論がかみ合いそうにない。サッカー関係者は自分たちのことしか頭に無いようで、広島市民としての立場も念頭に置いて議論に参加してほしい。

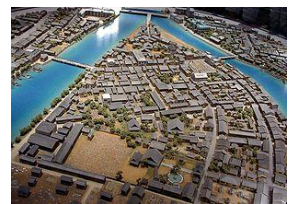
○広島平和記念公園の成り立ち

被爆都市ヒロシマの戦後の復興の軌跡を記録に留めておくことは価値が高く、現在、県と市が共同で作業を進めている。ここでは広島を特徴づけている平和記念公園、平和大通り、河岸緑地等について、過去の文献等を参考にしながら分かりやすく紹介したい。

第1回は広島をのまちのシンボルともいえる平和記念公園を取り上げる。

1. 被爆前の町並み

元安橋の東詰に旧「広島市道路元標」が設置。江戸の日本橋同様に広島の道路の起点となる場所であった。旧西国街道と交差し、太田川や瀬戸内海を利用した水運交通の拠点として、物資の荷揚げで賑わい、街の活況を呈していた。鉄道・電車・バス等が発達して、町の中心が紙屋町・八丁堀にシフトしたが、川に挟まれた中島地区境界は映画館や喫茶店などがあり、古くからの盛り場であった。戦前の繁華街を象徴する「すずらん通り」は中島本通り（旧西国街道）にも設置され、夜の街並みを彩った。



戦前の街並み（模型）

戦争末期になると空襲を逃れるために住民の疎開が相次ぎ、中島地区の南側（現在の平和大通り）は延焼防止のため、国民義勇隊や学徒動員等により多くの建物が取り壊されていた。

2. 被爆後の惨状

1945年8月6日午前8時15分、広島市の上空約580mで世界初の原子爆弾がさく裂した。爆心地に近い中島地区は鉄筋コンクリート造の燃料会館（現レストハウス）を除いてほぼ全壊し、街も住民も一瞬のうちに消滅した。当日、建物疎開に動員された学徒や近郊からの国民義勇隊員もほぼ全滅であった。

多くの人が水を求めて川に飛び込み、そのまま帰らぬ人となった。何とか家族のいる我が家に帰りたい一心で焼き崩れた瓦礫の中を彷徨いながら息途絶えた人も数知れず。しばらくは、戻らぬ家族の安否を求めて、焼けただれた死体の転がる街中を探し回る光景が続く。

どんな惨状であろうとも、そこから逃げ出すことはできず、幸運にも被爆当日離れていた元住民たちが戻ってくる。周りに転がっている焼け残った瓦礫や廃材を使ってバラックを建て、そこで生き抜くことを始める。中島地区にも400戸程度のバラックが建てられた。



被災後（模型）

3. 広島平和記念都市建設法の成立

1945年11月には国が戦災復興院を作り、翌年の10月に広島市を含む全国115の都市を戦災復興都市と指定し、各都市で復興の都市づくりが始まる。

広島では、1946年2月に広島市復興審議会がスタートし、10月、11月には道路、公園、土地区画整理事業等の広島復興都市計画が決定。中島地区が戦災記念公園となることもこの頃にはほぼ固まる。

しかし、廃墟と化した広島のみを復興させるためには、人も物も金も足りない。支援を国に要望しても、戦災都市を国中に抱えた国は広島市だけを特別扱いするわけにいかない。苦肉の策としてひねり出されたのが、憲法第95条による特別法である。一つの地方公共団体のみに適用される法律を制定して、国等から復興事業の促進のための援助を勝ち取ることができるようにすることだった。

特別法の制定には市長を筆頭に、市議会や地元選出の国会議員等の血と汗のにじむ尽力により、国会議員を動かし、GHQの賛同も得て、国会に提出される。

広島平和記念都市建設法は1949年5月に衆参両院において満場一致で可決された。特別法を制定するためには住民投票で過半数の同意が必要で、7月7日に住民投票が行われ、8月6日に公布・施行された。この法律により、広島を世界平和のシンボルとして位置付け、広島の都市づくりを国家的事業とすることが約束された。

4. 設計コンペ実施

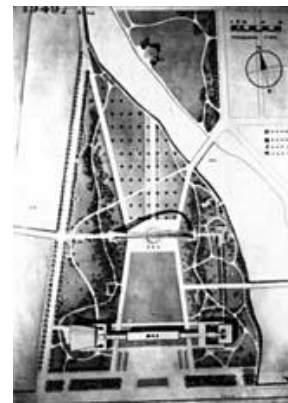
広島復興都市計画の中で、被爆死した人々の霊を慰めるとともに、史上初めての被爆都市として平和を希求する場にしようという中島公園の計画も、財源不足と困窮のなか、生活により密着した住宅建設を望む強い声に押され、挫折するかに見えた。

しかし、広島平和記念都市建設法の制定の動きにより、勢いを取り戻し、中島公園の計画名称も「平和記念公園」と変わる。

平和記念公園と記念施設の全体をデザインする設計コンペを実施することになり、1949年4月20日に公募を開始する。

7月18日に締め切られ、多数の応募の中から当時東大助教授の丹下健三氏のグループが1等に入選し、広島平和記念都市建設法が公布された8月6日に公表された。

丹下案については、後述の「丹下健三生誕100周年プロジェクト」の記事で紹介されているので、省略するが、広島のみを構想から発想して提案した案は他の追随を許さず、誰もが認めざるを得ない最優秀作品であった。



丹下グループ当選案

5. 平和記念公園の建設

丹下グループの当選案も順調に進められたわけではない。予算不足等のため、大アーチは取りやめ、西側の集会場は公会堂として地元財界の寄付により、地元の事務所の設計となる。

1949年の広島平和記念都市建設法の制定を受け、1950年度から予算化される。原爆資料館は1951年2月に着工したが、最終的な完成は1955年8月である。平和記念館も1952年3月に着工したが、完成は1955年5月である。

一方、公会堂は大集会所にホテルの機能が加えられ、1953年11月に着工し、3館では最も早く1955年3月に完成している。

1952年に慰霊碑が完成し、この年から平和記念式典をこの地で開催する。しかし、慰霊碑の北側には多くの民家が残し、幔幕を張って仕切りをしていた。民家が完全に取り除かれ、跡地を植栽し、平和記念公園としての形を整えたのは1959年の式典からである。

なお、この公園の建設は、失業に苦しむ被爆者や復員兵や引揚者の多くの方々の労苦の結晶であることを銘記したい。

その後の幾多の変遷を経て、今日の平和記念公園の姿となるが、次回以降に譲りたい。

* 「広島被爆40年史・都市の復興」等の文献を参考とする。 (瀧口 信二)

○旧広島市民球場跡地活用に対する読者からの提案

提案者：若本修治

菓子博終了後も含めて、市内に残る「跡地」利用に関して、広島市から発表された「旧広島市民球場跡地の活用方策」などの資料も踏まえて個人の意見・所感をお送りいたします。以下、旧広島市民球場跡地利用をイメージして私が考えるステップを思いつくまま書き綴ります。

1. 機能やアイデア以前に、判断基準や目指すべき指標を討議すべき

▼松井市長が「若者を中心としたにぎわいのための場」という、漠然とした方向性を示しています。しかし、もっと方向性に関して、広島の歴史や風土、時間軸、統計データ、海外も含めた他の成功事例なども含めて、目的や対象、そして来場者数、期待する効果など、より具体的な『将来ビジョン』を緻密に詰めたうえで、各委員会や団体から出されたアイデアに対して「検証」というプロセスが必要だと思います。

例えば、来場者のターゲットだけでも「若者を中心という」大雑把なものではなく、対象を広島市民中心にするのか、それとも他地域からの観光客の比率やリピート率をどの程度に考えるのか？またその人たちがどのくらいの時間そこに滞在し、この場所でどの程度のお金の消費を期待する(あるいは入場料の不要な公園)のか・・・

来場者の6割が広島市民で、県外や外国のリピーターは多くを見込めず、ほとんどが公園など入場料が得られない施設と考えると、来場者の7割が観光客や試合観戦、業務視察などで、リピート率が2割程度と考えるのでは、目指すべき来訪者数も必要となる施設も、将来の都市景観や広島の対外イメージも大きく異なってきます。

前者のような広島市民中心であれば、商圈が市内を移動するだけで、広島市の経済のパイは増えません。対外的なメッセージもほとんど影響ありません。建設投資で一部が潤うだけでしょう。利用者の目標も経済効果も測るまでもなさそうです。

一方後者を指標とすれば、誰を呼ぶべきかが明確になり、施設のハード面だけでなく、集客方法や情報発信、将来の交通体系や都市の性格まで、影響を与える可能性が出てきます。年間500万人を超え、外国人の来訪者が100万人という目標を掲げることも可能かも知れません。そこで一人当たりいくらのお金を支払うのか、できればそこまでイメージしたいものです。

2. 指標の優先課題や将来目標の明確化

▼なぜそのような指標を定めたのか、広島市の将来像にとってどのような影響を期待しているのか、市長自身が市民に語り、その指標が各アイデアの「評価基準」になることを公開すれば、一般市民でも目標や指標の実現性をイメージし、活用案を判断できるようになります。

現在各所から出されている「活用案」のほとんどは、機能を中心としたアイデアにしか過ぎず、それを聞いた市民も自分たちの『主観』での判断しか出来ない状況です。サッカーが好きだから『サッカー専用競技場』とか、広島にも文化や芸術の拠点が欲しいから『劇場や博物館誘致』といった主張で混乱します。何に決まったとしても、「賛成少数、反対多数」でしょう。

5年後、20年後、50年後など中長期の時間軸も考慮して、判断する拠り所が明確であれば、多くの市民に対して「客観性」を持って、どのアイデアがより適切で効果が期待できるかを説明し、絞っていくことが可能です。

3. 長期の投資採算と波及効果、実現可能性の検証

▼厳しさを増す広島市の財政状況から、建設投資だけでなく、将来のメンテナンスやインフラ、渋滞や駐車場対策、公共交通体系、エネルギーコントロールに至るまで、より詳細なフィージビリティスタディを幾通りか考える必要があります。

4. 参考事例（伊勢神宮内宮『おかげ横丁』）

▼かなりスケールの小さな事例となりますが、式年遷宮の今年、伊勢神宮にお詣りした際、内宮の表参道の町「おはらい町」を訪れました。

その参道(通り)に接した2700坪の30軒程度の民家が立っていた場所に、伊勢が賑わっていた江戸～明治時代の街並みを再現した『おかげ横丁』が出来、年間10万人の通行しかなかった通りに、年間400万人集める横丁が出現しています。



おかげ横丁

ヨーロッパも含めて、そこでしか体験できない歴史や文化には、地元の人がノスタルジーを感じる以上に、観光客にとってもこちらよい景色や体験を楽しめ、リピーターを集めているような街路、エリアがあります。

原爆ドームや平和公園などは、世界遺産として日本国内や外国からも人を集めますが、広島市民がアウシュビッツやひめゆりの塔、南京大虐殺の跡地にリピーターとして何度も訪ねないのと同様に、悲惨な歴史とどこでも見られる景色は、二度行きたい場所にはなり得ません。

原爆ドームから道を挟んですぐ見える場所に、戦禍で失われた歴史・文化や賑わい、美しい景観などが再現されていれば、広島市民にも海外から来られる観光客にとっても、共感され誇りが持てる街になるのではないかと私は考えています。

私個人のアイデアで恐縮ですが、2010年に上記のようなことを踏まえて、旧広島市民球場跡地利用私案というコラムを書いていますので、参考にご紹介します。

⇒ http://cms-hiroshima.com/column/vol_56.htm

福山の「鞆の浦」がそうであるように、『100年後も後世に残したいと思えるような街や景観を残すこと』が、現代を生きる私たちの役目ではないかと思っています。

それもひとつの指標です。

○アイデアコンペの中から提案！

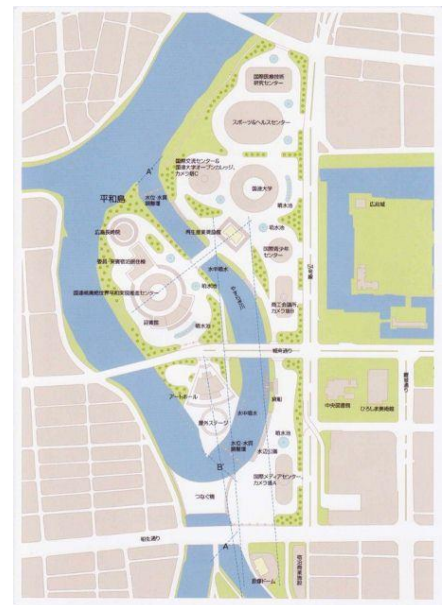
当面、2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペの提案作品の中から市民の多くが良いとした案を紹介していく。

- ・審査員特別賞 作品番号12 (タイトル「核廃絶世界平和実現を推進する本拠地」)



やすらぎ川を新たに掘って平和島を作り、そこに国際平和関連施設を誘致しようという奇抜なアイデアが、目を見張るが、根底に核廃絶・世界平和実現を推進するための活動の場、世界交流発信の場にしたいという強い願いが込められている。

実現性は二の次として、このアイデアに込められた広島平和記念都市建設法「恒久平和を誠実に実現しようとする理想の象徴」を具現化した提案として、審査員から高く評価された。



配置計画

受賞者：石原滋氏 (広島市民) のコメント

広島は世界のヒロシマ。人類にとって特別な意味を持った場所。現在、行政が行っている広島市民球場跡地⇨広島市中央公園に対する取り組みに対しては、目先のことだけに捕らわれた飯事にしか思われません。「未来へ向かう志、ビジョン」が伝わってこない。最も大切なヒロシマの理念を何処かに置き忘れてしまっている。理念がないから確りしたコンセプトも立てられない。結果、単なるアイデアの寄せ集めになってしまう。報道等を見る都度、失望で気分が落ち込んでいます。

ヒロシマを国際平和都市と謳っておきながら新たな「ヒロシマ」の街づくりに於いて、変に若者に媚びたり、ちょっと聞こえは良いが「広島市民の手による広島市民のための」とか、偏狭な「枠」で括ってしまうようなことから間違っている。世代、性別、民族、国境、あらゆる線引きを越えた視点から考えるべき問題なのではないのか。

最初から可能性を限定してしまうから、あのような矮小な案しか出てこない。私のあの地に対する理念は「人間自らが作り出した地獄の業火の中で亡くなられた方々の心に応え報いていくこと」、コンセプトは「ヒロシマに世界中の人々を迎え入れ、核兵器廃絶・世界平和実現に向け話し合い、活動する場にする」。この考えについては以前とまったく変わりはありません。

先日、某TV局から《海と生きる「奇跡の宝石箱 瀬戸内海」》という番組が放送されました。里海というコンセプトのもと集い活動し始めた人々のことや、世界のヨット乗りたちがその美しさに感銘し、少しずつ集い始めているという。世界的リゾート地になる可能性をも秘めた美しい瀬戸内海に抱かれた入り江の地・広島。

世界に出向いていくのも良いが、世界を迎え入れる方がもっと素晴らしいと思いませんか。それは解決不可能に思える問題をも解決可能にする叡智を集結することに繋がっていきます。「広島はヒロシマを《世界平和の礎・ヒロシマ》にできるはずなのに」と今も希求しています。

○紹介 まちづくり関連の団体とその動き

・ほのぼの広島会の紹介

体の不自由な人たちが安心して気楽に外出できる街「ほのぼの都市」を作るために地道に活動している勤労者向けのボランティア「ほのぼの広島会」です。

平成9年11月に発足し、以後、毎月例会を開催しています。余暇を活かして、無理なく楽しくやろうをモットーに市の社会福祉協議会等との連携をとりながら、広島市民のやさしさ向上のためのイベント等を実施しています。

(主な活動内容)

1. 『バリアフリーチェック』活動

ハートビル法・交通バリアフリー法などに照らし合わせた調査を実施し、改善提案を管理者やマスコミに提出して、早期に改善してもらいます。



2. 『ほのぼの安心マップ』活動

広島市繁華街で、自由に使える障害者用トイレの有る建物を探し、場所や使用可能時間などを明記した地図を作り無料配布します。

3. 『ほのぼの車いすツアー』活動

しまなみ海道、秋の宮島、買い物ツアー、入浴ツアー、錦帯橋、アクアスなど、障がい者と一緒に、楽しい車いすツアーを定期的に開催します。

4. 『アルミ空き缶・ペットボトル蓋・古切手等収集』活動

アルミ空き缶とペットボトルの蓋を収集し、施設などに車いすなどを寄贈し感謝状を受領します。

▼ホームページ：<http://honobono-hiroshimakai.com/>

○広島菓子博に対して

『広島菓子博』のような、全ての人に開放すべき会場で、①電動車いすの使用禁止、②ベビーカーの使用禁止、等は、前世紀の古い思想だと思います。しかも今の日本は、高齢者が増え、子供を増やしたい状態ですから、①電動車いすの歓迎、②ベビーカーの歓迎が、あるべき姿だと思います。『広島菓子博』実行委員長他関係者達は、時代遅れ思想を大いに反省すべきです。

次回開催地では、歓迎への対策を万全にして事故の無いようにして、全ての人々が安心して楽しめるように工夫すべきです。同様な改善は、『広島フラワーフェスティバル』その他の『祭』でも言えます。手押し車いす、電動車いす、ベビーカー、白杖使用者、等が安心して楽しめる『フェスティバル』や『祭』について知恵を絞るべきで、こう言う時代が変わったことを強く認識すべきです。

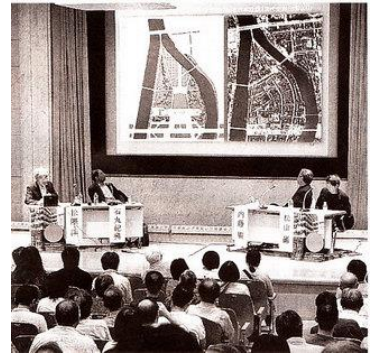
『広島菓子博事件』のお陰で『広島フラワーフェスティバル』では、今年から大きく前進しました。来年は更に前進することを期待します。(ほのぼの広島会 田中 聡)

○丹下健三生誕100周年プロジェクト

広島シンポジウム開催

丹下健三と戦後広島の出発点—平和・復興・建築

- ・主催 丹下健三生誕100周年プロジェクト実行委員会ほか
- ・開催日 平成25年6月29日（土）
- ・会場 広島平和記念資料館
- ・参加者 320人（定員300人）



中国新聞（2013，6，30）転載

<基調講演のポイント>

①「丹下健三と日本近代化」 松山 巖（評論家・作家）

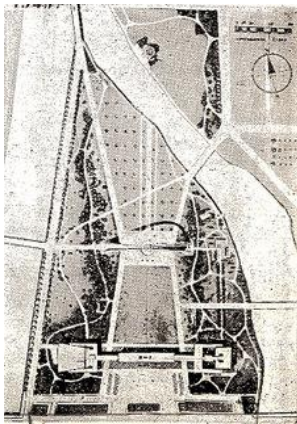
- ◇ 広島は丹下の第2の故郷。旧制広島高校時代（現・広島大学）に建築家を志す。原爆投下2日前、今治で父が他界。8月6日今治空襲で母を失う。広島戦災復興計画へ志願し参画。
- ◇ 時代を予見する天才。丹下以上に世界に情報発信した建築家はいない。
- ◇ 1949年は丹下の「運命の年」。広島ピースセンターは丹下の実質的デビュー作。
- ◇ 原爆ドーム・都市計画諸要素と調和した周到な配置計画は、当時だれも発想できなかった。
- ◇ 高度経済成長と巨大建築に巻き込まれた丹下。組織上層部との密接な関係を専門家は酷評。

②「丹下健三と私たちの世代」 内藤 廣（建築家、東京大学名誉教授）

- ◇ 丹下は国家の威厳を表現する宿命を背負った「神殿建築家」といえる。
- ◇ 作品はブリコラージュ（Bricolage）＜材料を寄せ集めて創造すること＞必ずネタがある。
- ◇ まちづくりの原点は「住民の立場に立つ」こと。今の建築家は本当に信頼されているのか？
- ◇ 戦後「戦災復興計画」や東北「震災復興計画」は真に住民の立場に立った計画と云えるか？
- ◇ 平和記念公園は「人類に立ち上がる勇気を与える存在」であり続けてほしい。

③「丹下健三と広島ピースセンター」 石丸紀興（広島諸事・地域再生研究所代表）

- ◇ 平和公園コンペはまさに丹下の為にあったと言えよう。丹下は広島の復興計画に深く関わり誰よりも広島を熟知していた。
- ◇ ル・コルビュジェの作品（ソヴィエト・パレス、1931年）が設計思想の原点。
- ◇ 平和公園は単なる慰霊施設ではなく「平和を創り出すため工場」と考えていた。
- ◇ 最初から軸線があったわけではない。敷地のネットワークのスタディをして「つづみ形」を着想した。ついで100m道路と垂直な軸を基本に展開し、原爆ドーム遥拝の軸とした。
- ◇ 丹下氏が広島に残したものを守り、生かす努力を続けて行きたい。



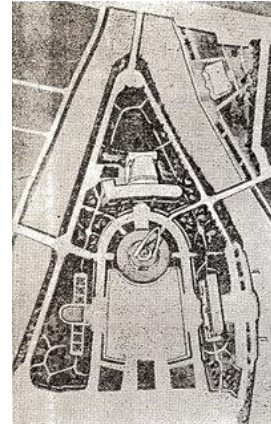
1等丹下健三他3名案

瀬戸内海から望めるよう、公園中央に高さ60mの巨大アーチ



2等山下寿郎建築事務所案

主要街路を遮断して市街地と隔離された公園空間



3等荒井龍三（創和建築事務所）

三角形の公園の頂点に中心軸を向け100m道路とは斜角

<コメント>

- ◇ 平和公園コンペの上位3案を参考に掲載する。(出典：建築雑誌第756号、昭和24年) 丹下案は原爆ドームを含み都市的スケールに対し、他の計画案は公園内のみを視野に入れた建築計画にとどまっている。応募数は132点、作品の所在は不明。応募者は3名の入選者の他に4名(地元から佐藤重夫、河内義就)だけが判明している。
- ◇ 被爆直後、丹下たちの貢献は極めて大きい。地元広島「暁設計事務所」が焼けビルを拠点に膨大な作業をこなし、広島の復興に多大な貢献したことを特記しておきたい。昭和21年に設立された広島の本格的な建築設計事務所。村田正、河内義就、大旗正二ら後の広島建築界リーダーが多数在籍していた。(石丸紀興・李明、日本建築学会論文より)
- ◇ 最初の香川県庁職員による主催者挨拶に違和感を持った。広島ではなく、なぜ香川県? 丹下健三100周年プロジェクトは「瀬戸内国際芸術祭2013」の中心的イベントなのだ。丹下氏と関係の深い瀬戸内4市(広島、高松、岡山、今治)でシンポジウムが開催される。香川県の役割が理解できた。周到に計画された広域イベントは見事。(高東博視)

□ほっとコーナー

『ユーチューブ・デビュー』

瀧口 信二

ザ・コストケンスの楽曲をユーチューブにアップロードした。プロでもアマでもない私の幻のバンドである。

若い頃から音楽が好きだった。といっても、周りに音楽が溢れていたわけではない。ラジオやテレビから流れてくる巷の流行歌を聞いて、口ずさんでいた程度である。

ビートルズと出会ってから変わった。自作自演できる若き英国のロックバンドだ。自分にもできるのではないかと思わせてくれた。日本でも彼らに触発されて、吉田拓郎や井上陽水らのシンガー・ソングライターがキラ星のごとく登場していた。

私もギターを手にしたが、上達はしなかった。鼻歌交じりで数曲作ったが、目の前の就職を考えるとあきらめざるを得なかった。

そして、30有余年のサラリーマン生活を無事終える。晴れて自由の身となり、やり残し感のあった楽曲作りにいそしむことになる。

幸運にも、最後の職場でジャズマンと出会い、私の鼻歌に立派な演奏を付けてくれた。これまで自費でCDを制作し、友人たちに配っていたが、この度、めでたくユーチューブにデビューさせた。

世界のどれだけの人が聴いてくれるか楽しみである。万が一つにヒットするかもしれない。ドリームジャンボを買った気分である。

もし、この宝くじが当たったら、私のボランティアの財源に注ぎたいと思っている。

ただ、私はドリームジャンボを買ったことがない。(笑い)



□あとがき

今号に旧球場跡地活用策の評価の視点等について、読者から貴重な意見をいただいた。世の中にはひろしまのことを真剣に考えている優秀な人が沢山いる。まだ埋もれている賢人たちを掘り起し、光を当てていくのも、このメルマガの使命の一つと思う。

ひろしまの賢人たちよ! もっと声を上げよう!

(瀧口 信二)

読者の皆さん、菓子博後の跡地利用について投稿をお待ちしています!

その他に自由な提案・意見をお寄せ下さい。次号に掲載させていただきます。